

被災地を訪問して思ったこと  
2003 年経済卒 小林太一朗

11 月 2 日、11:30 前に新花巻駅に着く。立派な新幹線駅舎とは対照的に周囲は何もない典型的な新幹線中間駅である。新花巻駅から貸切の岩手県北バスに乗り込み、釜石自動車道路、国道 107 号、国道 340 号を経て北上高地を抜け気仙川沿いに陸前高田に向かう。内陸の花巻から沿岸の陸前高田市の間に連なる北上高地は切り立った山並みはなく、隆起準平原の地形のなだらかな稜線が続いている。国道沿いの紅葉は見ごろというより、まだ紅葉シーズン前といったところで、ガイド氏いわく例年より遅く、見ごろになるにはもう一週間はかかるとのこと。途中、「川の駅よこた」で小休止する。このあたりからは、陸前高田市内であるが山間部のため、津波や震災の爪あとはない。あたりを見る限り、駐車場には「あゆの里まつり」と書かれたのぼり旗がならび、気仙川の清流沿いで施設や周りの農村風景は震災前とほとんど変わらない、のどかな風情である。さしあたり、売店の「龍泉洞コーヒー」を飲み一息入れる。香料や添加物を入れないブラックは混じり気がない澄み切った味わいであった。

陸前高田市の沿岸部は震災ガイドがバスに乗車し、大津波による市内中心部の被災状況の解説を受ける。さて、陸前高田市中心部の津波高は 14-17m で、海岸に程近い 5 階建ての雇用促進住宅は 4 階部分まで津波が到達し、気仙川河口の気仙中学校は 3 階建校舎の屋上まで津波が到達し全壊した(教師生徒は全員避難し助かったとのこと)。こうした建物は今後も震災遺構として取り壊されず、現状のままにされるといふ。市街地で私たちが見たのはすでに 2 年半を過ぎ、瓦礫は撤去され、1 年位前にはあったであろう建物の基礎もきれいに剥がされ、沼地や草原と化したただ広い野原であった。津波以前の街並みを知らない私には、そこに街があったとはにわか信じがたい光景である。浸水域は、広大な工事現場と化し、方々で稼働する重機、行き交うダンプや工事車両、残り少なくなった瓦礫、建設中の 12.5m の新たな防潮堤の盛土が不自然な人工的な光景をなしている。防潮堤は海岸線に沿って築かれ、低いダムのような構造物である。これについては住民からは海が見えない、刑務所の塀みたいだという意見もある。工事中ということもあるせいか、風景的には不自然な圧迫感があり、ダムの下流側にいるような違和感を覚える。もし、津波が再びこの地を襲った場合、水平線のかなたから津波を視認することなく、気づいたときは津波が堤防を乗り越えてくるのではないだろうか。この堤防の内側を嵩上げして災害公営住宅を建設する計画になっているが、今回の津波高(14-17m)より低い堤高(12.5m)になっており、機能面でも疑問が残る。

陸前高田をあとにし、国道 45 号線に沿って大船渡、釜石を抜けて大槌町の三陸花ホテルはまぎく(旧浪板観光ホテル)に向かう。三陸のリアス式海岸というのは地図上で入り組んでいるのは理解していたが、実際にバスで通ると高低差も大きく国道はアップダウンの連続で、海沿いの道でありながら、同時に曲がりくねった山坂道でもある。道路が海岸付近から少し坂の上に行くと津波の痕跡はなく、一見して従前のままである。ただ、傾斜面の合間のわずかな平地に仮設住宅や仮設店舗、復興工場の宿舎・作業所のプレハブが被災地であることを思い起こさせる。そもそも、もともと人口稠密な地域ではないから、仮設店舗や仮設住宅もそこかしこにあるわけではない。大船渡あたりでは「大船渡プレハブ横丁」と書かれた、仮設商店街が散見される一方、新たな水産工場が建設されたり、港湾が整備されており、復旧もある程度形になっているように思う。

大船渡から国道 45 号線から三陸自動車道に乗入れ峠道をバイパスする。リアス式海岸の沿岸地区は集落ごとに山で隔てられており、次の集落に行くにも曲がりくねった坂道を山越えしなければならない。地図上ではあの山の向こうは海になるのだが、そこから海は見え山が連なり、

山地が続いているかのようだ。海側を眺めても山が見えることに、何度も違和感を感じた。被災地であるという固定観念によるものだろうか、それとも比較的、沿岸が海に向かって平地である福島県に普段住んでいるからかもしれない。

三陸自動車道は10分ほどで終点となり、道の駅「さんりく」でバスは小休止となる。ここも海から直線で2kmほどだが、周囲を山に囲まれた地形である。このあたりでこの日は夕暮れになる。秋の日はつるべ落としというとおり、山あいには暗くなり、少し寒くなってきた。駐車場には復旧工事のダンプが往来しており、その日の仕事を終えた作業員同士で談笑している。売店コーナーでガイドさんお勧めの地酒「酔仙」を買う。瓶には奇跡の一本松がプリントされており、いかにも被災地関連商品としてわかりやすい。もっとも、一本松については枯死しており、今しがた見た一本松は復元モニュメントである。

ホテル到着後、勉強会として「NPO 法人テラルネッサンス」の「大槌復興刺し子プロジェクト」の説明を受ける。被災地の女性がTシャツや布巾に刺繍を施し、その販売収益を彼女たちの収入にあて、生活を支援するという事業である。ほかに、復興予算事業を通じ、現地の被災者の雇用の創出に寄与しているとのことであった。会場でも即売会が実施され、めいめいがそれぞれ思い思いの商品を手にしていった。

勉強会2部では、岩手県校友で釜石大槌地区行政事務組合の佐野美徳さん(1978・理工)が、震災以降の一連の被災地の経過について話をされた。津波の動画を大画面で紹介されると、臨場感があり、人々の叫び声や瓦礫がきしむ音が生々しかった。また一例として、釜石消防庁舎建設工事等にかかわられている経験から、復旧復興工事の入札不調が続いている現状をあげ、資材費や労務費が高騰し予定価格を上回るケースが相次いでいるとのことであった。私の住む福島県も災害公営住宅の着工が入札不調で遅れているという報道があり、複雑な思いをした。

宿泊した三陸花ホテルはまぎく(旧：波板観光ホテル)は、津波で壊滅的被害を受け、今年8月30日にリニューアルオープンしたばかりでオープンから3ヶ月も経っていない。そのため、館内全般は新しくきれいである。同じ階の客室には宿泊者名に「郡中福幸バスツアー」と書かれた部屋があった。これは福島県にある郡山中央交通の企画している、福幸イキイキバスツアーという被災地応援ツアーで、参加者は家族連れやお年寄りが多く見受けた。時を同じくして、被災者同士、被災地同士の交流に私と同じ福島から来ている人を見るのはうれしかった。私が思うに、あの日あの時からひとりひとりが、お互いが語り始めれば尽きない、たくさんの艱難辛苦をこの2年半背負って生きてきた。わずかな時間ながら被災者同士の出会いや語りも、慰めあいや励ましあいも今日を生きる支えになっている。被災者同士が悲しみを共有し、お互いを思い、お互いの幸せを願うこと以上に心に届くものはない。

朝6時ごろ来光を見て、大浴場で朝風呂につかるが、平日の仕事や旅の疲れが抜けない。昨夜は飲みすぎというわけではなかったが、年齢が無理を許さなくなってきたのか、同室のいびきがうるさく眠れなかったせいも、両方である。1階の朝食会場に向かう廊下は海側にあり、浪板海岸を一望でき、大きなガラス窓がはめられ、海面に近いこともあって、海が眼前に迫っており、あたかもその水面を歩いているような感覚になる。波間に陽光がきらめき、淡いコバルトブルーに揺蕩う波はどこまでもおだやかで、湾内は静けさを保っている。震災や大津波といった悲劇が夢や幻だったのか、と思えるほどに、穏やかに波が寄せては引かず、ただ、波板の片寄せ波が幾重にも寄せているのみである。

2 日目は大槌を出て釜石に戻る形で南下し、抜け内陸部の遠野市に向かい、遠野から花巻へと戻る行程になっている。昨日、来るときは日没後のためあまり視界が利かなかつた大槌町を抜け、<sup>うのすまい</sup>鵜住居にさしかかると鵜住居地区防災センターの悲劇が紹介された。海岸部に程近い鵜住居地区防災センターは防災訓練で避難時の集合場所となっていたので、大震災の津波襲来時も山手にある神社ではなく海岸至近の防災センターに多くの住民が避難していた。結果として防災センターごと津波に飲み込まれ 200 人以上が津波の犠牲者になった。防災センターという名称も、津波に耐えられるかのような紛らわしいもので、津波の直前の避難訓練でもここが避難場所だったため、住民にここに逃げれば安心という誤解を植え付けてしまったのだ。結果論になるが、これは天災というより人災であり、防災行政の難しさもあると思うが責任は重いといわざるを得ない。

釜石から遠野には県道笛吹峠、一般国道 283 号仙人峠、高規格道路となる仙人峠道路の 3 つのルートが存在する。今回はもっとも新しいルートの高規格道路の仙人峠道路に行く。これは将来的に釜石自動車道の一区間となるが、現在は無料開放されている。急勾配、急カーブの連続であった国道ルートと異なり、北上高地の天井を長大なトンネルや橋梁の大規模工作物で克服し北上高地の中腹を一気に貫く。トンネルとトンネルの合間の山間の高架橋梁からは見ごろを迎えた紅葉が雄大な山々を彩っている。同じ北上高地でも昨日の山々と気候が異なり、紅葉が進んでいるようだ。今回の旅程からは外れたが、個人的には旅情という観点から、急勾配や急カーブはたまたまループで峠を越えてゆくという旅情が味わえる、一般国道 283 号仙人峠もいずれ訪れてみたい。

バスは仙人峠を超え一般国道 283 号に合流し、北上高地の準平原の平坦部である遠野盆地に入ると、右手に北上山地の最高峰である早池峰(標高 1917m)<sup>はやちね</sup>が見えてきた。釜石では晴れていた空も、ここにきて雲行きが怪しくなってきた。早池峰は遠景からもそれとわかるひときわ雄大なシルエットを浮き上がらせているが、あいにく曇り空で灰色がかって見えるのみである。バスを降りると沿岸部に比べ気温は低く、コート無しでは肌寒くなってきた。

遠野市内にある岩手最大のボランティアセンターの拠点、特定非営利法人「遠野まごころネット」に立ち寄る。町工場を居抜きで使っているという感じの佇まいで、ボランティアスタッフは作業に出払っているせいか、所内は照明もほぼ消され閑散としている。震災直後のガレキの片付けは一段落し、現在は近隣の農家の手伝いをやっているようだ。基本的に土木や農業の軽作業に近い内容になっている。掲示板に求人内容(ボランティア活動)が記載され、朝に各人が希望するそれぞれの求人(ボランティア活動)に応募したり、割り振られて出かけてゆくようだ。遠野まごころネット事務局の方が丁寧に活動内容を説明してくださる。これまでに、およそ延べ 10 万人のボランティアを送り込んだとのこと。震災から 2 年半が経つが、いつまで活動を続けるのかという参加者の問いに、自分たちが必要とされなくなるまでと回答されていた。彼らの理念としては、究極の目標は自分たちがいなくなること、ということだ。ただ、行政の復興計画や被災者支援策が被災者のニーズと乖離している部分を、補完するセクターとして NPO やボランティアが市民権を得つつあることを考えれば、この地域に深く長く根ざしていく必要があるだろう。

今回のツアーでは NPO やボランティアの活動を知る機会が多かったが、復興政策が届かないところや、特に個人個人の生活にかかわる部分で、それらが不可欠な役割を果たしており、インフラの一部となっていた。復興事業や補助金の受け皿となって雇用を創出したり、企業と連携して被災者の生活再建に取り組む事業を起こしたりという、大企業や公的機関ができない部分で小回りがきき、被災者の生活に直結している分野に強い。また、ウェブサイトやフェイスブックなど SNS での情報発信に強く、被災者と被災者を応援したいと思う人との橋渡しを行っている。

所内でわれわれが入ってきたときから、黙々とさつまいもを雑巾で擦っている青年が一人いた。声を掛けてみると、関西からボランティアにやってきた大阪市大の学生とのこと。前日は沿岸部の被災地を見て回ったが、今日は帰りのバスの時間の都合で、所内の作業を割り振られたという。今は3回生で進路は兵庫県庁を目指しているとのこと、それを聞いた一行の兵庫県校友会会長で兵庫県庁を勤め上げられた辻寛氏が感銘を受けられたようで、名刺や連絡先を交換していた。阪神淡路大震災では被災者であったが、今はこの被災地に支援ツアーやボランティアという形でその体験を共有しようとしている。先述した福島から来ている福幸バスツアーと同様に、被災者同士のつながりもこの旅程では多く遭遇した。

復興とは何か。今後、津波で浸水した地域には人は住むことができないので、元の街並みが戻ることはない。もともと過疎化や少子高齢化の進んでいた地域ということを考えれば、将来的にその地域が発展する材料も見出せない。商店なら商圈、勤め人なら職場を失い、廃業したり仕事を求めて内陸部に移転した人もいるだろう。私としては、復興とは、震災の影響から精神的に経済的に立ち直れることだと思うが、被災者一人ひとりが、あの日あの時から今に至るまで抱えている心の闇や不安が晴れる目は来るのだろうか。それは不可能だと思う。だが、元通りにはならないにせよ、何とかそれに近い「別の何か」を模索している真っ只中というのが、復興の実像ではなかろうか。人々のくらしや心は家電や車の修理のように簡単に元通りにいくものではない。

また、復興の妨げになりうるものとして、時間の経過や世間一般の関心の低下があげられる。福島の原発報道を別にすれば、震災関連ニュースも頻度が下がっており、必然的に日常生活で震災を意識することは少なくなってきた。時の経過は被災者の心の傷を癒していくが、同時に、人々の記憶から震災を忘却のかなたへと遠ざけてゆく。被災地の声ならぬ声を発信したり、汲み取る取り組みを継続している、本学校友会のこうした取り組みは今後ますます重要になってくると思う。

今回のツアー参加者には、阪神淡路大震災を体験された方や、私と同じく福島から来たという交友もお見受けした。また、去年の被災地応援ツアーのリピーターという方も多かった。被災地を知ると同時に、去年ツアーでお会いした方とも旧交を温めたり、被災地の校友や参加者同士の新しい人とのつながりが形成できた。今後事情が許せば、このような機会に参加できればと思う。

旅のお土産にと、このツアーに賛同されたサッカーの松井大輔選手のご尊父(校友)から松井大輔選手の応援メッセージをプリントしたトートバッグとTシャツが配布された。また、岩手県コースにもかかわらず、今回訪れることのできなかつた宮城県の校友の佐々木圭亮氏が経営される笹かまぼこ製造販売の「ささ圭」より笹かまぼこ詰め合わせセットをいただいた。今後、仙台のお土産は閑上名産「ささ圭」の笹かまぼこを求めようと思う。

終りになったが、今回のツアーに関わられた、校友会事務局員氏、近畿日本ツーリスト添乗員小西氏(この方も立命館校友とのこと)、岩手県北バスバスガイド「みゆき」氏およびバス乗務員氏にこのツアーでお世話になった謝意を表し、被災された方の生活が少しでも復興へと向うことを祈ってやまない。